
刀語×Fate ~現代に集う英雄たち~

フルフル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

刀語×Fate

（現代に集う英雄たち）

【NZコード】

N4219Z

【作者名】

フルフル

【あらすじ】

時を遡ること数百年前・・・第1次聖杯戦争・・・

その場に召喚されたサーヴァントたちは、なんの因果か「刀語」において時代に名を刻む英靈たちだった。

まだ戦国の世が終わつて間もない時代、に激闘を演じた英雄たちが、今一度現代に蘇り、聖杯をめぐる・・・

始まり始まり
・
・

～英霊召喚～（前書き）

刀語とフェイントのクロスオーバー作品です。

召喚されるサーヴァントが全て刀語関係の人物という。
洒落にならない不自然さ。

正直両作品とも知っている方はそんなにいると思いませんが。
知っている方は、楽しんでください・・・

そこには一人の人間が居た。

暗い、狭い、臭い。

床には謎の文様がある部屋だった。

そんな場所に彼女は一人で立っていた。

そしてその少女の目の前には、朽ちかけの誰かの白髪が置いてあつた。

「閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ」

その場にいた一人の少女は、何かを喋り始めた。

「繰り返すつどに五度。ただ、満たされる刻を破却する」

「素に銀と鉄。礎に石と契約の大公。祖には我が大師シユバインオーラグ」

「振り立つ風には壁を。四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ」

「告げる・・・・・」

「汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に」

「聖杯の寄るべに従い、」の意、」の理に従つなれば應えよ・・・」

「誓いを此処に、我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を
敷く者」

「汝三代の言靈を纏う七天、抑止の輪より來たれ、天秤の守り手よ
！」

床の文様が輝き、部屋全体が揺れる。

大気が震え、目の前が光り輝く。

そして少女の目の前に「何か」が現れた。

現れたそれはヒトではない。

ヒトであった、かも知れないが、今はヒトではない。

そんなものが少女の目の前に現れた。

「・・・あれだ、えつと・・・」

現れたそれは少女に向けて喋り始めた。

「あなたが俺のマスターか？」

～英靈召喚～（後書き）

結構ミスマッチなクロス作品ですが・・・

うまく行くよつに頑張ります。

～甦る虚刀流の男～（前書き）

続きものなので、少しづつキャラを増やしていくと思います。

始まり始まりつつ？

「甦る虚刀流の男」

「あんたが俺のマスターか?」

それはそう言つた。

「ええ、私が貴方のマスターよ

少女はそれの言つことに応えた。

「それで、貴方のクラスはなに?」

続けざまに少女はそれに質問をした。

「ああ、俺は多分、セイバーだと思ひぜ」

表情を変えることなく、淡々とそれは応えた。

「わかつたわ」

短くそれだけを言つと、少女は扉の前まで行き、部屋を出た。

「・・・・・」

それは黙つて立つていた。

「一」

何かに気づいたように、それは床の一部を見つめていた。

視線の先には朽ちかけの白髪が置いてあった。

ゆっくりと、それは視線の先に近づき、跪いた。

「久しぶり、とがめ」

それは表情を崩し、微笑んでいた。

「なんで貴方が私の名前を知ってるのよ？」

少女は扉の横で、跪くそれを見つめていた。

「ん・・・? あんた、とがめって書いつの?」

「やつよ、咎める女と書いて、とがめと読む」

少女は言い終わると、その田の前に来た。

「真名は?」

「真名?・・・ああ、本当の名前か」

ぬつ、と立ち上がり。

それは静かに、若い声で言った。

「虚刀流七代目当主、鑓七花、だ」

言い終わったその口元に、少女は寂しさを感じた。

「予想通りの名乗りね、まあそのために聖遺物をコレにしたんだも
のね」

少女は床に置いてあつた白髪を、ひょい、つと掴んだ。

「貴方に一番親しい人物の遺物……でしょ？」

「・・・まあな」

悲しげな視線で、それは白髪を見つめていた。

先程の微笑みは、今は消えている。

「ちよつと、辛氣臭いわよ」

少女はケタケタ、と笑いながら言つた。

「とにかく、これからはお互いパートナーなんだし、ヨロシクね」

「ああ

それが、七花と、咎女の、出会い。



同時刻・・・・・

「俺は、眠いんだよ

（）（）（）（）（）

同時刻・・・・・

「拙者ことあめこひもひだりだいわざる」

（）（）（）（）（）

同時刻・・・・・

「不名乗、名乗る必要はない」

（）（）（）（）（）

同時刻・・・・・

「うわらは遊びに来たですよー。」

~~~~~

同時刻・・・・・

「早々で申し訳ありませんが、私は死にたいんです」

~~~~~

同時刻・・・・・

「ぼくは英雄じゃなくて、仙人なんだけどね」

~~~~~

時を同じくして、七体のサーヴァントが現代にその勇姿を表した。

しかし、その全員が、全員に面識のある人物だとは、誰も知らない。

少なくとも、今はまだ。



## 「甦る虚刀流の男」（後書き）

刀語を読んでいる方は、誰がでるか分かつてしまつたかもしませんね。

続きます。

## 「蘇る居合斬りの浪人」（前書き）

今回登場するは、生前、因幡砂漠に城を構えた浪人。

光速を超える居合斬りの達人。

名を宇練銀閣。

そんなこんなで雑劇寸劇茶番劇。

フェイト／カタナガタリ第3話・・・

始まり始まりつ

## 「蘇る居合斬りの浪人」

そこはとある教会。

教会の床には謎の文様が刻まれている。

そこには前者と同じく女性が立っていた。

少女と呼ぶには大人びていて。

大人と呼ぶには幼く感じる。

大学生のような女性。

「閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ」

その女性も謎の言葉を唱え始める。

簡略。

・・・「天秤の守り手よ…」

女性の目の前は光り輝き、教会から光が漏れる。

突風が吹き、女性の服がたなびいた。

そして、またしても、それは現れた。

今はヒトではないそれが、この女性の前にも現れた。

「…………」

それはぱりゅせりゅうてこむみりだ。

あぐらをかき、刀を肩を支えに抱いている。

黒髪長髪のそれは、眠っている。

「あの…………起きてもらえますか？」

女性はそれに対して、声を発した。

それは皿をゆっくりと開けた。

浅い眠りだったようだ。

ふつ、と言つて首を少し動かしたそれは女性に。

「おまえさんが……俺のマスターって奴か？」

と、言つた。

「はい……そうです」

女性はか細い声でそれに返答した。

「分かった……それで、俺に用でも……？」

ふわあ……とあぐらをしながらそれは言った。

「えっと・・・名前を教えてもらいますか？」

「人に名を聞くなら、自分から、じゃないか？」

それは肩を回しながら言った。

「あっ、すいません・・・私は間桐瞬つて・・・言います」

「ああ、まとう・・・まじか、ね・・・」

手のひらで顔をこすりながらそれは言った。

「じゃあ、あなたの名前も教えてください・・・」

「ああ・・・・・・名前ね・・・名前・・・」

田をこすりながら、それは立ち上がり。

「宇練家十代田当主、宇練銀閣・・・だ・・・」

ようようと立ちつつ、それは生前の名を名乗った。

「宇練さん・・・・・・ですね」

瞬はそれの・・・いや宇練といつ名を確認して、更に尋ねた。

「じゃあ、クラスはなんですか？」

「クラスね・・・・・・アサシン、ってクラスじゃないか？」

銀閣は退屈そうに周りを見回しながら応えた。

「えつ、アサシンですか・・・？」

瞬は少しだけ驚いたようだった。

それは瞬の知っている銀閣が「剣士」だったからだ。

てっきりセイバーのクラスで現れたと思っていた瞬は。

「なんで・・・アサシンなんですか？」

と思わず聞いた。

質問が多いな・・・、と銀閣は頭を少しかいた。

「あれだ・・・暗いところに屈座つてたのと、よく暗殺者に・・・  
狙われたから・・・かな」

納得のいく応答とは言えない応答だったが。

「あつ、そういうなんですね、分かりました」

と瞬は納得した。

「眠いんだが、寝ていいか？」

銀閣は腰を下ろして、田を軽くこすつた。

「あ、あのー」

瞬は少し大きな声で言つた。

「これから、よろしくお願ひしますー。」

そして瞬は手を銀閣に差し伸べた。

しかし。

「・・・・・」

握手を求めた瞬の手は握られず、銀閣はすでに眠りに落ちていた。

「・・・私も、眠くなつちやつたかな・・・」

教会のど真ん中で寝てゐる銀閣を、瞬は隅まで移動させた。

「おやすみなさい」

そして瞬も教会の椅子に腰を下ろし、置いてあつた毛布で体を包んだ。

それが、銀閣と、瞬の、出会い。

## 「蘇る居合斬りの浪人」（後書き）

はい。

順番的にセイバーの次がアサシンってどうよ？

と友達に言われてしまいました、が。

一応銀閣は2番目の敵なので。

順番は折れてないです。

というわけで、次回は「不」を誇りとする元忍者。

が登場する予定です。

では。

## 「未練を残した相生の元忍者」（前書き）

今回登場するは、全てを一度失つた男。

失われた忍法・拳法・剣法を駆使する。

名を左右田右衛門左衛門。

そんなこんなで奇態失態時代劇。

フェイト／カタナガタリ第4話。

始まり始まりつ

「未練を残した相生の元忍者へ

そこはどじやの屋敷。

和風の作りにして、部屋は全てふすまにて区切られている。

そんな和室の一室に。

またしても女性が立っていた。

いい加減男キャラを出せ、といつ声は聞こえないふりをするしかない。

そしてその部屋の床にも、謎の文様が同じように刻まれている。

更に、その文様の中心には、「不忍」と書かれた、安っぽいお面が転がっていた。

「準備オーケー」

その女性は青い瞳で田の前の光景を確認し。

「閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ」

前者と同じ言葉。

簡略。

「天秤の守り手よー！」

ちよつと軽い声で女性が言い終わると。

部屋に風が流れ、少しふすまが揺れた。

そして予想通りそれは現れた。

黒い洋風スーツを纏、顔面に「不忍」と書かれたお面をしている男。

それは現れた瞬間から跪いていた。

「お久しごりでいらっしゃいます、否定姫様」

それはそう言つた。

「否定する~」

そして女性はそれを否定した。

「私はお前の言つことを否定する。私は否定姫じゃない」

女性は続けざまに否定を続けた。

「そうでしたか。では、否定姫によく似ている、あなたは一体・・・

」

少し寂しげな表情をして、と言つても表情は確認できないが。

それは女性に問い合わせた。

「私はあなたのマスター。それ以下でもそれ以上でも、はたまたただのマスターでもない」

女性は続けて言った。

「否定姫、つてのは確かに私の祖先だけど、私は否定姫じゃない」

それの言つことに分かりやすく、女性は応えた。

「では、マスター。あなたの名前は」

「否定姫」

「は?」

女性の名乗りに、それは疑問を持った。

「勘違いしないでね、私は否定姫じゃない、だけど私は否定姫と名乗る」

そして、こう続けた。

「あなたが仕えるべきなのは、いつの時代も否定姫だけなのよ」

女性は何かをぼかすように言った。

「感謝します」

それは短く女性に返した。

その類には、なにか水が伝つていたようだが、それは氣のせいだろう。

「それで、あんたのクラスは」

艶やかな声でそれの聞いた。

「アーチャーです」

「ふうん、まあそれもそうよね」

納得したかのようだ。女性は続けた。

「あんたの宝具は、飛び道具だものね」

まるでそれの全てを知るかのようだ。

女性は言いのけた。

「で、あんたの名前は、左右田右衛門左衛門、で間違いないわよね

「はい」

皿うなが乗っを上げることすら、それは出来なかつた。

「右衛門左衛門、とりあえずまよひじく、と言つてあげる」

女性は区切り区切りで言つた。

「うわうわ、否定姫」

「花丸」

女性は少し微笑んで、それに言った。

「マスターとサーヴァントって関係は正直、面倒くさいのよ

続けて。

「だから私は一心同体、と表現するわ」

と言った。

「姫様に頂いたこの名にかけて、勝利を約束します」

ふふっ、と笑って女性はふすまに手をかけて言った。

「じゃあ私はもう寝るから、あんたは・・・屋根裏にでも寝なさい

そう言つて、ふすまをピシヤ、としめた。

人間の居なくなつた部屋で、それは短く言った。

「はい、否定姫様」

それが、右衛門左衛門と、否定姫の、再開・・・いや出会い。



「未練を残した相生の元忍者」（後書き）

次回は怪力剛力の無双少女。

一族の最後の生き残りにして、虚刀流を破った少女。

が登場。

## 「天真爛漫な剛力少女」（前書き）

今回登場するは、極寒の冬山で生まれ育ち。

無双の怪力を有し、無邪氣で純粋な少女。

名を凍空こなゆき。

そんなこんなで一体全体時代劇。

フェイト／カタナガタリ第5話。

始まり始まりつ

## ～天真爛漫な剛力少女～

そこは山中。

正確には山中の山小屋。

内部に区切りはなく、大きな一部屋で構成される山小屋だ。

その小屋の床には、恒例の謎の文様が刻まれている。

「閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ」

いつもどおり、同じような言葉が聞こえる。

若い、男の声だ。

やつと男キャラがでてきた事に、感動を覚える。

簡略。

「天秤の守り手よ」

小屋 자체はボロい作りだ。

文様から吹き出た風により、入口の扉が外れて吹っ飛んだ。

そして小屋のあらゆる場所から、光が漏れた。

案の定、それは現れた。

全身を白い防寒具のよつな毛皮で包み。

幼さの中に純粹さを感じる、少女の姿。

「あなたが、つちつちのマスターですか？」

それは一般に「口づけ」でやつづいた。

見た目通りに、幼いようだ。

そして、元からいた男性も。

「うん、僕が君のマスターだよ」

と言つた。

男性の方も、身長こそそれより高いが。

年齢に関しては、それと同じくらいだった。

「君の名前は？」

男性、いや、男子はそう聞いた。

「つちつちは凍空」なゆき、つて言つますー。」

それに対し、それは正直に応えた。

「「なゆきつやんだね」

男子は続けざまに質問をした。

「じゃあ、Jなゆきちゃんのクラスは何かな？」

なんだか、子供を誘拐するお兄さんみたいな喋り方である。

しかし、それは、正直に応える。

「はい、うちっちはバーサーカーってクラスだと思います」

男子は目を丸くした。

バーサーカーといつのは、簡単に言いつと、理性を失う。

そして、その代わりに、ほかのサーヴァントを超越する破壊力を得る。

そういうクラスである。

だが田の前のそれは、きちんと理性を保つている。

さらに言えば、華奢な少女の身体に、他の追随を許さぬほどの怪力があるようにも見えない。

そういう点から、男子は驚いたのだ。

「Jなゆきちゃんはバーサーカーなのに、なんで理性があるの？」

ビストレートに男子は聞いた。

包もうとは全くしない。

「えつと、幾分、生きてた頃に一度理性を失つてゐるから・・・」

それは続けた。

「だから今は理性が戻つてゐるのかもしませんよ」

どうやら本人も、詳しく述べ知らなこよつだ。

「そつか、うん、分かつた」

男子は「口」、と微笑んでそれに近づいた。

「」れからよろしくね、」なゆきひやん

」なゆきの頭を撫でながら、男子は言った。

「はー。よろしくお願ひしますー。」

」なゆきも元気にそれに返した。

しかし。

「あつ、やつといえば、マスターの名前はなんて言つんですか?」

」なゆきも男子に質問を返した。

「僕かい?僕の名前は・・・」

少し間を置いて、男子は言った。

「遠坂桃季、だよ」

「とおさか・・・とうり、さんですね」

「こなゆきはマスターの名前を確認して、少し笑った。

「それじゃあ、これから僕は山に鹿をとりに行つてくれるね」

男子はそういうと、外れた扉を軽々とほめ直し。

壁に立てかけてあつた鎧を手にとつた。

「いっかくも行きますー。」

「こなゆきは桃季についていこうとした。

「ダメだよ、山の中は危険だし、くまでも出たら大変だ」

「大丈夫です。くまくらになら、片手で倒せますから」

桃季は乾いた笑いを浮かべた。

それが、こなゆきと、桃季の、出会い。

## 「天真爛漫な剛力少女」（後書き）

どうもです。

次回は虚刀流最強の人間。

努力を軽んじ、才能で全てを紡ぐ。

生きることに死ぬ希望を感じる異端。

登場予定。

## ～繰り返す虚刀流最強の女～（前書き）

今回登場するは、最強にして最狂にして最凶。

歴史上最強の強さを持つ、弱き強者。

名を鑑七寒。

そんなこんなで悲劇惨劇無惨劇。

フェイト／カタナガタリ第6話。

始まり始まりつ

～繰り返す虚刀流最強の女～

そこは小さなアパート。

そのへんの廃墟のようなアパート。

その一室の床。

そこにはもう言つまでもないが、謎の文様が描かれている。

その部屋にはリーゼントの男が立っている。

「閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉びつ。」

・・・・・?

「痛つ～」

“うやうやしく舌を噛んだよつだ。

途中で呪文は途絶えてしまつた。

「よーし、もう一度だ」

その男は初めから呪文を唱え直した。

「天秤の守り手よつ！」

床の文様が青く光輝いた。

今までで一番の強風が吹き荒れ、リーゼントが崩れた。

そして、それは現れた。

「あなたが私のマスター……ですか？」

が細い声だ。

「おう！ オレがお前のマスターだ」

男は髪型を整えながら言った。

「そうですか」

短くそれは応えを返した。

「美人なのに釣れねえなあ、色々話すことあるだろ？」

男は軽い口調でそれに言った。

「そこそこ若いようだ。

「そうですね、でも申し訳ありませんが

そこで一度区切りをつけ。

「私は早く死んで脱落したいんです」

それは言った。

「はああ？」

男は田元を逕ませながら言った。

自ら脱落したいなんてサーヴァントなど聞いたことがない。

驚きも当然だらう。

「なんで死にたいんだよ？ オレ何か悪い」としたか？」

男は少し申し訳なさそうに聞いた。

「いいえ、あなたが原因で死にたいわけではありません」

「だつたらどうして・・・？」

それは静かに応えた。

「私はもつ生前ににおいて役目を果たしました」

それは続けて語った。

「弟の成長を見届ける」とができました

「私は生前になんの未練もありません」

「生き返る意味も、私にはほとんどありません」

それは男に向けて言いのけた。

しかし男は言つた。

「ほんどう、お前、今、ほんどう、って言つたよな？」

男はきらんと話を聞いていた。

「私にはほんどうあります」

ほんどう、とこいつは、少しなら未練は残つているよいにも捉えられる。

男はそこには注目した。

外見とは違い、頭はキレるようだ。

「ほんどう、こいつは、少しなら生を返してやりたい」と、あるんじゃねえのか？」

男はそれに向けて言つた。

それは少し強く応えた。

「唯一、未練があるなら、それは」

また区切りをつけて言つた。

「今の弟と全力で勝負したら、どうなるかが気になるくらいです」

このカードは、生前に弟と真剣勝負をした。

その時は弟の知人の「奇策」という作戦により。

自らも認める敗北を味わった。

生前のそれは体が異常に脆く。

全力を1秒でも引き出せば、全身が砕け散るような激痛を伴つ。

そんな生前を送つたのだ。

全力を余すことなく引き出せる今の状態は、それにとって至高だろう。

「十分な理由じゃねえか」

男は強く言った。

「弟と全力で兄弟喧嘩したい・・・これ以上なく熱い理由だぜ」

なにかを取り違えているようだ。

「オレはこれ以上なく最高のサーヴァントを呼んだみたいだぜ」

完全になにかを勘違いしているが。

それは言った。

「面白い方ですね・・・マスター」

初めてそれは男をマスターと呼んだ。

「わかりました、健全な身体を得た私の力も試したいですし」

それはどうやら戦いに参加するようだ。

「おー、それはそうと、お前の真剣と、クラスはなんなんだ？」

男の問いかけにそれは静かに応えた。

「虚刀流……」

それは言葉を詰まらせ、言った。

「虚刀流七代目仮当主、鑣七実です。クラスはランサーだと思いま  
す」

本来は当主でもなんでもないのだが、それは言った。

「なるほど、ランサーか……でも槍とか持つてねえみてだけど？」

ランサーとは槍を操るサーヴァント。

当然の疑問だらう。

「私の得意技は、相手を槍の「」とく貫く技ですから」

平然と淡々とそれは応えた。

「な、なるほど……」

少し顔をひきつらせている男。

それは男に言った。

「マスターの名前は、なんですか？」

その質問に男は得意げに応えた。

「オレの名前は如月弦太郎だ、すべてのマスターと友達になる男だ！」

大声で勝ち名乗りでも上げるよつよこ、名乗った。

「わわいわわい、げんたわわい。 ですね」

それはゆつくつと言い直して、覚えた。

「おひ、じゃあこれからよろしくな、七実！」

男はクラスではなく、それを生前の名前で呼んだ。

「はい、弦太郎」

それもマスターと呼ばずに、男を名前で呼んだ。

それが、七実と、弦太郎の、出会い。



～繰り返す虚刀流最強の女～（後書き）

次回登場するは。

剣においては敵を知らず。

剣聖とまで言われた墮剣士。

登場予定。

## ～鎧びついたもう一人の最強～（前書き）

今回登場するは、虚刀流にも引けをとらぬ墮剣士。

本物の強さを有し、自身を失敗作と語るもう一つの完了。

名を鎧白兵。

そんなこんなで刺激突撃時代劇。

フェイト／カタナガタリ第7話。

始まり始まりつ

## ～鑄びついたもう一人の最強～

そこは海が見える浜辺。

その浜辺にはもう言いたくないが謎の文様が描かれている。

そこには女性が立っている。

せりしにタンクトップの野性的な風貌。

「閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ」

いつもの呪文を女性は唱える。

簡略。

「天秤の守り手よ」

文様が輝き、風が吹き、波が強く揺れた。

周りに遮蔽物がないために、それだけだ。

そしてそれは現れた。

「・・・・・・・・・・・・・・

現れたそれは何も喋らない。

「何か言つたらどうだ」

女性はそれに話しかけた。

「…………」

しかしそれは何も言わない。

「私はシグナム・」・トライペルタだ

「お前を女性は言ひのけた。

「…………」

しかしそれはやはり何も言わない。

「長いからシグナムでいい」

女性は続けた。

「お前のマスターだ。これからみみへ

女性は氣にするひなく話しかける。

「…………」

ブチッ。

何かがちぎれるような音がした。

「何とか言えっしー。」

女性は現れたそれを思い切り殴り飛ばした。

「あつ、済まない」

女性は素で謝った。

少しだけ悪びれていたようだ。

「よー」

浜辺の砂を手で払いながら。

初めてそれは喋った。

「緊張で喋れなかつた拙者でも非はある

・・・・・

「あつ、あい、誰でもある」とだ。されば緊張で言葉を話なかつたようだ。

「まつ、まい、誰でもある」とだ。

流石に女性も申し訳なく言った。

まさかサー、アントが緊張するなんて思いまじないだひつ。

それ故に女性は少し動搖した。

「それで、私の話は聞いていただろう?」

「ああ、しっかりと聞いていた」

今度はそれは返事を返した。

「ならば、お前の真名とクラスを教えて欲しい

女性はそれに聞いた。

すると。

「拙者の名は鶴田兵、クラスはライダーだ

流れのよくな声で応えた。

「そうか、では鶴、これからよろしく頼む

女性は握手を求めて、それに手を差し伸べた。

だが。

「その前に其方の名を教えてはくれまいか

それは女性に問い合わせた。

しかし、今の問い合わせはすでにできている。

女性はすでに名乗つて居るのだから。

「私はさつき名乗つただろ」

自らが名乗つた事を女性は告げた。

「さうか、だが其方に見瀉れていて聞き逃した

見瀉れる。

それは確かにそう言った。

「シグナム・」・トラペルタだ。三度田はないぞ」

心無しか、女性は早口で名前を言い終えた。

その類は赤く染まつてゐるよつて見える。

「シグナムだな、心得た」

それは女性の名前を確認し、覚えた。

「改めて。よろしく頼むぞ、錆」

「ああ、承つた」

2人は今度こそ挨拶を交わしあつた。

「拙者」ときめいてもひつじがる

それはなんの脈絡もなくそんな事を言った。

「一。」

すると女性の顔はもう真っ赤になつた。

「一、いきなり何を言い出すやー。」

女性はそれに怒りを向けた。

するとそれは静かに応えた。

「気にするな、これは拙者の口癖だ」

と囁いた。

あととん、とした顔になつた女性は

「・・・むひーい、帰るやー」

そつとつひ、踵を返して浜辺を歩き始めた。

「拙者ことあめ・・・」

「うるさいー。」

それが、鎧と、シグナムの、出来事。

～鎧びついたもう一人の最強～（後書き）

ふう・・・

次が最後のサーヴァントとなります。

～実際に最後になるかどうかはわかりませんが～

次回登場するは、仙人。

誰に対しても公平で、何に対しても平等。

登場予定。

「未だ見ぬ伝説の仙人」（前書き）

今回登場するは、不老の仙人。

千差万別の容姿を持ち、誰に対しても温厚公平。

名を彼我木輪廻。

そんなこんなで過激感激時代劇。

フェイト／カタナガタリ第8話。

始まり始まりつ

「未だ見ぬ伝説の仙人」

そこはビルの屋上。

都内でも大きいほうのビルだ。

そこには1人の人間が居た。

いつものように、屋上には謎の文様が描かれている。

「閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ」

いつもの呪文を唱え始める。

簡略。

「天秤の守り手よ」

屋上は元から強風が吹いている。

文様から発された強風も、その強風に書き消される。

眩い光が文様を輝かせた。

そして、それはまたしても現れた。

「やあ、君がボクのマスターかい？」

軽口でそれは言った。

1人称を「ボク」としているが、声は女性の声だ。

「そうだ。俺が君のマスターだ」

対して人間は「俺」と言い、声も男性のそれだ。

「それにしても、ここは風が強いね。寒い」

現れたそれは「巫女装束」という着物を着ている。  
季節的にも寒いはずはないのだが。

「そうだな、場所を変えよう」

男も同意し、2人は階段を降りていった。

場所は移り、屋上下のフロア。

その一室にて。

「うん、ここは暖かいね」

それは手を擦りながら、言った。

どうやら本当に寒かったようだ。

「なによりだ。それで話を進めてもいいか?」

男は部屋の椅子に腰をかけ、それも座るように促した。

そして2人は向かい合つように、座っている。

「なんの話かな？」

「無論、君についてだ」

相変わらず軽い口調のそれに、男は眞面目に話す。

「なんでもどうぞ」

男をしつかりと見つめながら言った。

「まず、君の真名を教えてくれ」

男も口をそりそりとそれを見つめる。

「仙人、彼我木輪廻」

それはゆっくりと名乗りを上げた。

「ひがき、りんね、だな。ありがとう」

相変わらず、見つめ合う形で会話を続けている。

普通の人間ならば、意識的に口を逸らすものなのだが。

2人は依然として、見つめ合っている。

「他には？」

「元をこせつかせ、言つ。

「君のクラスを教えてくれ

男は静かに質問を続いている。

「キャスター。それがボクのクラスだよ

今までのよう、「多分」とか「だと思つ」ではなく。

自らが「キャスターである」と断言するような言い方だ。

「なぜキャスターの座に招かれた?」

「簡単なことさ」

そこで区切りをつけ、それは続けた。

「ボクは剣も槍も弓も、扱えない」

「はたまた万物を乗りこなせるわけでもなく、狂戦士にも向かない」

「残るは暗殺者と魔術師だけど……ボクはそのどちらかになるハズだつたんだ」

「それで、たまたま、キャスターになつたわけだよ

召喚されたそれは、生前に「戦士」として生きていたわけではない。

武器を操る技能など、皆無なのだ。

「なるほど。大体分かった」

そういつたと、男は立ち上がり、その前に立った。

「君の名前も教えて欲しいんだけどな？」

それは座つたままで言つた。

「失礼。俺の名前は」

そこで区切りをつけて、続けて名乗つた。

「2年Fクラス代表、坂本雄二だ」

知つてゐる人は知つてゐる。

だがそれには触れない。

「2年？ Fクラス？ 代表？」

それは疑問だらけの名乗りに困惑していふようだ。

「気にしないでくれ、名前だけ覚えてもらえば十分だ」

男はそれに手を差し出した。

「よろしく頼む、輪廻」

するとそれも立ち上がり、その手を握った。

「ああ、ようしぐね。雄一」

それが、輪廻と、雄一の、出会い。

「未だ見ぬ伝説の仙人」（後書き）

ついに7体のサーヴァントが集結しました。

もつ全員の紹介と名乗りは終わったので・・・

次回は教会の招集。

果たして顔見せに応じるのは誰なのか？

こうじ期待。

## ～集結～（前書き）

前回やつと紹介が終わつたので・・・

今回から本格的な話が作れそうです。

というわけで・・・

そんなこんなで見たい聞きたい時代劇？

フェイト／カタナガタリ第9話。

始まり始まりつ

集結

場所は日本。

そして冬木という地域

その地にて、今回の聖杯戦争は始まる。

~~~~~

冬木市の教会。

そこには聖杯戦争を取り仕切る「監督役」が存在する。

聖杯戦争のルールに対する参加者を記する

それが教会の仕事だ

そして現在協会には4人の人間がいる

1人は「この世」の「力者」・如月強力郎

1人はアサシンのマスター・間桐瞬。

どのマスターもサーヴァントを具現化させてはいない。

そして、もう一人は。

「よく来た、聖杯を望む者達よ」

黒いローブを羽織った若い男がそう言った。

この男こそが聖杯戦争を取り仕切る「監督役」である。

教会の派遣した、有能な人材なのだろう。

「君達をここに呼んだのは他でもない」

目の前の3人の人間に。

いや、「人間ではない4体の獣」も含めた3人と4体に言った。

おそらく4体の獣は他のマスターの使い魔だろう。

自らの姿を周知に晒すことを、百害と判断したのか。

姿を見せたのは3人だけだ、

「聖杯戦争は今回が初めてだ。ルールの説明を行う」

監督役の男は続けて話を進めた。

「同じモノを複数名が望み、臨んだモノが1つしか無い場合」

「他の希望者を蹴落として、手に入れる他はない」

「つまり、君達はこの冬木の地で聖杯を求め争う」

「それこそが聖杯戦争」

そこで一度区切りをつけて。

「前置きは「こんな感じだ。次に詳しいルール説明をしよう」

「君達は敵同士だ。相手を殺して、自分が生き残れ」

「勿論、サーヴァントのみを撃破し、マスターが生き延びることも可能だ」

「そういう場合、サーヴァントを失ったマスターの保護は教会で受け持つ」

「だが、サーヴァントの消滅と、マスターの死が、闘いの終ではない」

「マスターを失ったサーヴァントは別のマスターと」

「サーヴァントを失ったマスターは別のサーヴァントと」

「再契約を交わすことで、聖杯戦争に復帰することができる」

「そして最も重要なことが一つ」

もう一度区切りを付け、息を吸った。

「魔術を公にする」となけれ

「意味は分かるだろ？」「魔術を周知にしてはならないといつことだ」

「秘密裏に行われるのがこの聖杯戦争」

「人目もはばからず、堂々と魔術を使用するならば」

「教会よりそれ相応の対処をされることになる」

「最悪の場合、強制失格となる」

「そうなれば、監督役の権限において」

「すべてのマスターに失格者の排除を命じる」

「」——一度話を終えた。

男は呼吸を整え。

「何か質問は？」

と言った。

するとシグナムが手を挙げた。

「どうだ？」

男が発言許可を出す。

「マスター同士で同盟を組むのは、反則になりえるのか？」

一時的に手を組み、難敵に対処する。

戦いにおいてこの戦術を駆使せぬ者はいないだらう。

「問題ない、同盟をくもつが、裏切って殺そつが、それは自由だ」

「了解した」

そして、次に弦太郎が手を挙げた。

「どうだ

「必ず戦わなきやいけないのか？」

「どうこつ意味だ？」

「話し合いで勝敗をつけてもいいのかつて事」

話し合いで。

もう少し戦術的に言つなら「交渉」

相手との会話により、勝敗を決する。

稀有な戦術だが、効果的もある。

「問題ない。己の格の違いを認めたならば、辞退することも可能だ」

「分かった」

他に手を挙げる者はいなかつた。

「宜しい。ではこれにて説明会を終えるとしよつ」

続けて。

「現時点から、聖杯戦争を開始する。存分にその力を振るひがいい」

男は言い残し、去りうとした。

「待て」

シグナムが声をかけた。

「何かな？」

「名を」

監督役の男は名乗つていない。

名前を聞きたがるのは自然なことだらう。

「私としたことが、失礼」

そして静かに名乗つた。

「第1次聖杯戦争監督役、岬越寺秋雨だ」

読み仮名にしてみよ。」

岬越寺秋雨=「くわせうつじ、あきなめ。

完全に日本人のようだ。

「それでは失礼する」

男は教会の奥に消えた。

4体の使い魔は飛び去っていった。

残つたのは3人のマスター。

「それでは挨拶をさせてもらひなつ」

一番に口を開いたのは、シグナムだった。

「ライダーのマスター、シグナム・」・トラペルタだ

名乗りを終え、2人のマスターに叫ぶ。

「長いからシグナムでいい、敵同士だが、よろしく頼む

お手本のよがな挨拶を終えたシグナムは帰らうとしたが。

「俺はランサーのマスター、如月弦太郎だ！ ロシク！」

弦太郎は、協会全体に響きわたるほどの大聲で自己紹介をした。

「私はアサシンのマスター。間桐瞬です……よろしくお願ひします」

静かだが、瞬も自己紹介を終えた。

「弦太郎と瞬だな。お互に死力をつくさう」

そう言い終えたシグナムは今度こそ教会を後にしてしまった。

残るは2人。

すでに聖杯戦争は開始している。

協会を1歩出れば、即座に攻撃されてもおかしくない。

「瞬」

弦太郎が瞬の名を呼んだ。

「はっ、はい！」

いきなり声をかけられてびっくりしたのか、吃逆のような応答をした。

「これからヨロシクな」

弦太郎は仮にも敵に手を差し伸べた。

すべてのマスターと友達になるというのはハッタリではないようだ。

「あつ、はい。よろしくお願ひします」

瞬も弦太郎の手を握り、握手を交わした。

開始早々に友好的関係を築くのは、良策だろ？。

「それじゃ、またな！」

そう言い残し、弦太郎も教会を後にした。

そして、残った瞬はと、

「始まつたんだ……」

自分の手を自分で握り、そう言った。

「眠い……」

瞬は教会の椅子に腰掛、近くにあつた毛布で体を包んだ。

この協会が宇練銀閣の召喚に使われた教会であることは、

本人達と協会関係者しか知らない。

その起源である戦争が今、始まつた。

聖杯戦争。

～集結～（後書き）

はい。

次回あたりから個別の参加状況を書いていこうと思います。

バトルまであと3話くらいでどうか・・・

適当な目安ですが、次回に期待下さい。

～虚刀の直慢の宝具～（前書き）

いやはやじの小説も早くも10話目ですね・・・・・

皆さんの応援のおかげで勇気づけられます。

そんなこんなで無対絶対時代劇。

フェイト／カタナガタリ第10話

始まり始まりつ

～虚刀の自慢の宝具～

そこは絢爛豪華な造りのお屋敷。

その屋敷内には1人の人間と1人のサーヴァントがいた。

セイバーととがめだ。

その2人は同じ部屋にいた。

とがめの部屋に。

「ねえ、貴方本当に強いの？」

とがめが七花に向けて言った。

「いきなりだな・・・まあ強い方だと思つぜ」

七花は少しだけ自慢げに言った。

生前の戦績を考えても、強い方に入るであろう実力だ。

「でも、セイバーが剣を持たないなんてなんか不自然よね」

ここでセイバーのクラスについて説明しよう。

セイバーのクラスに招かれる条件は一つ。

「常軌を逸する剣技を身に付けた者」であること。

つまり剣に秀でていることが何よりの条件なのだ。

「おーおー、とがめ。お前は何か勘違いしてんじゃないか?」

七花は微妙に笑いながら言った。

「ん? 何がよ?」

とがめは自覚がないために、七花に聞いた。

「刀を持たない、じゃなくて。俺自身が刀なんだよ」

七花は続けて。

「いわば俺がセイバーなんじゃなくて、セイバーと言えるのは俺だけ。と言つてもいいかもな」

と言つた。

「大した自信ね」

親しげな会話を続ける2人。

もつもつ完全に打ち解けているようだ。

「まあ、闘つてみるまで分からぬけどな」

「そりゃそりやね」

部屋での七花は床に肘をつけて寝ている。

「それにして、貴方のその格好はどうよ？」同じ格好をしている。

「それが七花と向かって会つよう」、「同じ格好をしていいのかしら？」

「がめは顔が200mm程しか離れていない七花に会つ。

「格好つて？」

「上半身裸のその格好よ

「がめの会つとおつ。

七花の現在の格好は上半身裸・下は袴を履いている。

「そんな格好だ。

「ああ・・・でも別に不都合もないだろ？」

「真顔でそう会つ七花。

「正直、私の目のやり場に困るのだけれど」

「・・・？」

七花は生前も現在も鈍感である。

女性の『気苦労など、知る由もない。

「まあ、いいわ」

とがめはムクツ、と起き上がり、あぐらをかく形になつた。

「それで、貴方は何個の宝具を所有してるので？」

宝具。

それはサーヴァントの生前の異名や伝説から具現化された英雄の証。

それを多く所有するほど、生き残る可能性も高い。

そう言える程に宝具の重要性は高い。

「宝具……ねえ……？」

七花は明後日の方向を向いてそう言った。

「まさか一つも持つて無い訳じゃないでしょ？」「？」

少し苦笑いしながらとがめは聞いた。

「まさか。自慢の宝具が3つ程ある【ば】

3つも宝具を有するサーヴァントなど滅多にいない。

かの英雄王なら話は別だが。

それでも3つの宝具とは、立派な英雄の証だつ。

「 まつもー、凄こじやないのー。」

わざと打って変わり、田をキラキラさせているがめ。

「 でも、その内の一つひとつと理由があつて使えないんだよ

使えない宝具。

勿論そういう類の宝具もある。

呪いや制約により、宝具の使用制限のかかる場合もある。

「 ま、まあそれでも2つもあれば十分よ

とがめは少しテンションを下げたが、上機嫌だ。

「 わうか? とがめが良いなら、俺も嬉しいよ

七花はさつまつと、ゴロン、と姿勢を崩して寝転んだ。

「 あ、ちゅうと。一つ位今見せてくれてもいいんじゃないの? 」

宝具とはそんな無闇やたらと使つていいものではないが。

今のとがめはそんな事微塵も考えていないよ! だ。

「 え・・・今? 」

「 今」

力強く言つたとがめに、七花は根負けし、渋々立ち上がつた。

そして、庭に移動した七花ととがめ。

「一度だけだぞ」

「うん。貴方の自慢の宝具、見せて頂戴」

そして七花は庭の中心に移動した。

そこで変わった構えを取つた。

いや、構えていないのだ。

それは七花が生前に一度も使つことのなかつた構え。

虚刀流、零の構え・無花果。

「身体は剣で出来ている・心は鋼で作られる・技は鞘で磨かれる」

そんな言葉が呪文かを、七花は言つた。

「とまあ、こんな感じの宝具だ」

七花はまだ何もしてないのに、そんな事を言つた。

否、すでに何かをしていたのだ。

なぜなら・・・

「・・・こつ之間に後ろに来たのかしら？」

七花が今居るのは、とがめの真後ろだ。

庭の中心からとがめの背後まで、約30m。

どんなに早く走りうと、止まらねばすだ。

けりえりお

「これが俺の『宝具』、『疾駆する白髪の朋友』だ」

要するに、ただ速く走る宝具。

ただ速く動くための宝具だ。

だが、生身での剣技を扱う虚刀流にとつてはこれ以上ないアドバンテージだろう。

「へえ・・・地味だけど、なかなか良い宝具じゃないの」

「せっかく見せたのに地味つてひどくないか？」

そんなやり取りを、別のサーヴァントがしつかり見ていた。

屋根の上から。

「庭で宝具を見せるなんて、迂闊な事をするものだよ、七花君」

その声は女性のものだ。

「まあ、ボクは知るだけで直接鬭いはしないのだからけれどね」

そう言い残し、そのサーヴァントは去った。

～虚刀の冒頭～（後書き）

そんなに激しいバトルはまだ予定がないのですが・・・

はじめのバトルはランサーを出そうと考えています。

次回にご期待下さい。

～交戦～（前書き）

1月は更新が滞りそうなので。

今日明日は更新を続けます。

今回は初めてのバトル。

誰と誰が死合うのか・・・

始まり始まりつ

そこは冬木のスーパー。

深夜の安売りタイムを狙つて主婦が犇めいている。

その中に、1人の男が居た。

「ようし・・・今夜はすき焼きだ！」

如月弦太郎だつた。

サーヴァントである七実はいない。

靈体化しているのだろう。

現在時刻は9時58分。

安売りタイムは10時からだ。

あらゆる主婦が臨戦態勢に入つてゐる。

弦太郎も例外ではない。

「4日ぶりの肉・・・肉・・・」

弦太郎はお金がない。

現在高校生の身分なので、定職はない。

おまけにリーゼントを崩したくないという本人の意思でバイトも断られる。

所持金は2167円である。

そういうわけで、10時になつた。

「只今から、精肉売り場にて全品40%OFFセールを始めます」

メガホンでセール開始を呼びかける店員さん。

「数が少ないために、お1人様1つまでとさせていただきます」

店員さんの目の前には誰もいない。

すでに店の中では肉をめぐるバトルが始まっている。

「ちょっとーーアタシの肉取らないでよーー」

「何言つてるのよ、私が先にとつたじゃないーー」

「横取りなんて汚いわよーー」

罵詈雑言の嵐の中、弦太郎はお肉をゲットするために主婦をよけて進む。

そして、1人1つのお肉を2つゲットした。

△七実、頼む△

小声でサーヴァント・ランサーを呼び出した。

「どうしました・・・？」

普通の会話でも、七実は小声である。

「この肉、一人一つなんだけど・・・七実も買ってくれないか？」

どうやら七実も「一人」と数えて買いたい物するようだ。

「でもそれは・・・反則では・・・？」

「大丈夫、サーヴァントがダメなんて書いてないしな」

そのまま七実にお肉を持たせてレジに向かおつとしたが。

「そういう行いは看過できんな、弦太郎」

背後から女性の声が聞こえた。

「ん？・・・おお、シグナムじやんか！」

女性はシグナムだった。

その右手には、お肉を一つ持つている。

「一人一つまでだ。たとえサーヴァントでもそれは反則だろ？」

シグナムは自分のサーヴァントを具現化させていない。

「どうやらシグナムは1人1つの決まりを遵守するようだ。

「いや、でも、サーヴァントも人間だし良いだろ?」

「ダメだ。ルールをきちんと守れ」

シグナムは己の考えを覆す気はないようだ。

「じゃあ、オレがシグナムに勝つたら……認めてくれるのか?」

「……なぜそつなるか知らんが、良いだろ?」

シグナムは自分の持っていたお肉を戻した。

「私が勝つたら、弦太郎の肉を片方もらひ」

「オレが勝つたら、お肉は2つ共持つて帰る」

「「それでいいな?か?」」

素早くレジで会計を済ませた弦太郎は外の廃ビルで待っていたシグナムのところに行つた。

「それで、どうする?」

シグナムは弦太郎に質問した。

「ん? 何がだ?」

「サー・ヴァ・アント同士か、マスター同士か、だ」

闘う方法についての質問だつた。

サー・ヴァ・アントと人間が闘えば、人間に勝ち目はないが。

マスター同士で勝負を競うのも、聖杯戦争のルールには触れない。

「これはオレ達の問題だからな、マスター同士でいいんじやないか」

「了解した」

そう言つと、シグナムは自分のサー・ヴァ・アント・ライダーを具現化させた。

「錆、私の闘いを見ておけ」

「言われずとも、日に焼き付けよ」

そんなやり取りの後、錆はそのへんのブロックに腰掛けた。

そして弦太郎も七実に言つた。

「オレの初勝負、見ててくれよな」

「はい、弦太郎」

七実も錆の隣に腰掛けた。

「お初にお目にかかる、ランサーよ」

錆は七実に挨拶をした。

「 じゅうじや、 ライダー 」

七実も挨拶を返す。

お互に真名を明かしてはいない。

そして、弦太郎とシグナムは向かいあつた。

弦太郎はどこからか謎の機械を取り出した。

色は青い半透明で、4つのスイッチと穴が4つついている。

そして、機械の横には謎のレバーがついている。

それを腰に押し当てる、ベルトのよつに腰に装着された。

そして、胸のポケットから4つの小さなスイッチを取り出した。

それをベルトの穴に4つのスイッチを差し込んだ。

「ロケット・ランチャー・ドリル・レーダー」

そんな機械的な声が機械から響いた。

そして、ベルトに付いていたスイッチを一つづつ押していくた。

そして4つ全部を押し終えると、カウントダウンが響いた。

「3・・・2・・・1・・・」

すると弦太郎は左手を握り、拳を肩の高さまで上げ、胸の前で止めた。

右手で機械のレバーを握り、ガシュン、と動かした。

「変身つ！」

ビルに響く大きな声で、掛け声を叫んだ。

そして、弦太郎の体が光りに包まれ・・・

白い装甲の戦士になった。

「宇宙・・・キター―――つ――！」

大声で決めセリフを叫んだ弦太郎。

今彼の名前は仮面ライダーフォーゼ・ベースステイツである。

そして、シグナムは首に掛けていたネックレスに話しかけた。

「行くぞ、レヴァンティン」

するとネックレスが巨大な剣に姿を変えた。

そして、全身が白い光に包まれ。

数秒後、騎士甲冑をまとったシグナムが光りから現れた。

その右手には魔剣・レヴァンティンが握られている。

「仮面ライダーフォーゼ、タイマン張らしてもいいづせー！」

「ヴォルケンリッター烈火の将、シグナム、参る！」

ここに、サーヴァントは関係ない、肉をめぐるマスター同士の闘いが始まった。

～交戦～（後書き）

どうも。

かなりわかりにくいといつか・・・

知らない人の方が多いというか・・・

でもサーヴァントもちゃんと闘いますからね？

次回、シグナム対フォーゼ

「烈火の魔剣と雷電の光剣」（前書き）

どうも、フルフルです。

いえ作者の名前も覚えて欲しいな・・・みたいな。

気を取り直して12話となります。

肉・・・もとい聖杯をめぐる初の勝負が始まった。

シグナム対フォーゼ。

そんなこんなで危険体験剣劇勝負。

始まり始まりつ

（烈火の魔剣と雷電の光剣）

そこは冬木の街の廃ビル。

そこでは2人のマスターが激戦を繰り広げつづけた。

片方は如月弦太郎、またの名を仮面ライダーフォーゼ。

片方はシグナム・L・トラペルタ、またの名を烈火の将・シグナム。
お互いに見つめ合い、相手の出方を伺っていた。

「なかなか動かぬな」

「そうですね」

緊張感漂つ2人のそばでは、2人のサーヴァントが実況と解説をしていた。

ランサーの七実と、ライダーの鍛である。

2人はマスターから観戦するように言われているために。

現在は闘つ意思はない。

「しかし、其方のマスターは・・・変わった風貌だな」

「貴方のマスターもなかなか変わっていますね」

訂正しよう。

口論で闘つ意思はあるよつだ。

セツヒツしてゐる間に、1人のマスターが動き出した。

フォーゼはベルトの一一番右の1と書いてあるスイッチを押した。

「口・ケツ・ト・オン」

機械的な音声が流れ、フォーゼの右腕がオレンジ色のロケットに変わつた。

このよつなフォーゼの形態変化をモジュールチョンジと呼ぶ。

「行くぜ！」

右腕のロケットが火を噴射し、凄まじい勢いでシグナムに接近する。

「ライダーロケットパーンチつーー！」

勢いそのままに、シグナムに拳を入れよつとしたが。

「・・・」

シグナムはスつ、と身を引いて軽くかわした。

そしてレヴァンティンで一撃加えた。

フォーゼの勢いは止まらず、ビルの壁に激突し、崩れ落ちた。

「まさか・・・終わりではないだらうな」

シグナムがフォーゼの激突した壁を見ている。

「ああ、まだまだ終わんねえぜ！」

壁の残骸を押しのけて、立ち上がった。

そして、1と書かれたスイッチを戻すと、右腕のロケットも消えた。

「今度はコイツだ」

一番左の4と書かれたスイッチを11と書かれたスイッチに変えた。

〔シザース〕

短い機械音が響く。

そして、そのスイッチを押した。

〔シ・ザー・ス・オン〕

機械音の後に、フォーゼの左手が剣のような形のハサミに変わった。

「面白い、私と剣で競うつもりか

シグナムも自分のデバイス、レヴァンティンを構える。

レヴァンティンの現在の姿は片刃の洋剣だ。

この状態はシユベルトフォルムと呼ばれる。

「ハアっ！」

フォーゼは左腕のハサミでシグナムに切りかかる。

シグナムはそれをレヴァンティンでいなし、全てをかわす。

そして素早い剣戟でフォーゼの装甲を徐々に抉る。

「その程度か？」

シグナムは剣の騎士。

「と剣においては右に出るものはないだろ？」

依然としてシグナムの攻撃はフォーゼにダメージを与えている。
しかし。

「オリヤっ！」

力を込めたフォーゼの上段からの切り下さを、レヴァンティンで受け止める。

「ぐっ・・・」

しかし、予想以上の衝撃に、シグナムは膝をついた。

「なるほど・・・あのスイッチにより能力を変化させるのか」

その間に、フォーゼは²と書かれたスイッチを⁸のスイッチに切り替えていた。

「チェーンソー」

機械音が響くと同時に、そのスイッチを押す。

「チュー・ン・ソー・オン」

すると、今度はフォーゼの右足が鋭利なチェーンソーに変わった。

「何っ！？」

まさか足まで変化するとは考えていなかつたシグナムは、回避が遅れた。

レヴァンティンはシザースを抑えているために、チェーンソーの直撃を胸に受けた。

「ぐあっ・・・・！」

シグナムはアウェーで体を後ろに引いたが、胸には切り傷が残り、血が滴っている。

すると、フォーゼは少し距離を置いて、スイッチをすべて解除した。

「悪い、シグナム！ケガさせるつもりはなかつたんだ！」

なんと叫つが早く土下座までした。

「どうやらシグナムにケガをさせた事を本心に悪い」と思つてこのようだ。

「気にするな、弦太郎」

シグナムはすぐ立ち上がり、レヴァンティンを地面に突き刺した。

「私は今から本気で闘う、もしお前が手加減をしたなら、私はお前を殺すかもしれん」

「お互いに死なないためには、お互いが全力でやるんだ。弦太郎」

そう言い終えると、レヴァンティンを胸の前で刃先を上に向けて構えた。

「レヴァンティン、カートリッジロードだ」

レヴァンティンのマガジンから、カートリッジが2個排出された。

{ shuruncuefomin }

レヴァンティンの機械声の直後、刃が別れ、鞭のよつた形になった。この鞭のような連結刃形態をショランゲフォルムと呼び。

はじめの剣の形態はショベルトフォルムと呼ばれる。

「本気で来い・・・弦太郎」

ショラングフォルムのレヴァンティンを構えるシグナム。

「・・・分かつた、オレも本気で行くぜっ！」

そう言つと、フォーゼは1と書かれたスイッチを10と書かれたスイッチに変えた。

「エレキ」

それと同時にスイッチを押した。

「エ・レ・キ・オン」

すると今度は右手だけではなく、全身が黄色い光に包まれた。

雷が鳴り響き、光から黄金に輝くフォーゼが現れた。

その右手には電撃剣・ビリーザロッドが握られている。

この状態のフォーゼを「エレキステイツ」と呼ぶ。

「それがお前の本気か、弦太郎」

「ああ、正真正銘、オレの本気だ！」

2人は言い終えると同時に、構えを取つた。

シグナムは右手に力を込め、姿勢を低く構える。

フォーゼはエレキスイツチをビリー・ザロッドに装填し。

ベルトのレバーをガシュン、と動かした。

《コミットブレイク！》

リミットブレイクとは、スイッチの力を最大まで引き出す事だ。

そして2人は高くジャンプし、向き合った。

一
飛
龍
一
閃
！
！

紅の炎を纏つた連結刃が、竜のように舞う。

ライダー100億ボルトブレイク！！

黄の電撃を纏つた剣を、力の限り降り下ろす。

炎と雷のエネルギーが相殺され合う。

「ウオオオオオオオオつ！！」

そして膨大なエネルギーは一気に解き放たれ、大爆発を起こした。

ビルの窓は全て割れ、何箇所かは崩れ落ちた。

そして2人は・・・・・・

「ぐぬぬぬうううう・・・・・・

「ぬおおおおおうううう・・・・・・

シグナムのレヴァンティンはすでに最初のシュベルトフォルムに戻つていて。

そしてフォーゼはゼリーザロッジをレヴァンティンと拮抗させている。

2人はほとんど力が残っていないにも関わらず、剣同士をぶつけている。

しかし、それも長くは続かなかつた。

「う・・・ああ・・・・

シグナムはレヴァンティンを握つたまま、後ろに倒れ込んだ。

しかし、誰かの手により抱き抱えられた。

「見事だつたぞ、シグナム」

「ぐ・・・うう・・・・・・

フォーゼも同じように、後ろに倒れ込んだ。

しかし、誰かの手により、受け止められた。

「カツコよかつたですよ、弦太郎」

鈴はシグナムを、七実は弦太郎を受け止めたのだ。

そして数分掛けて、両者の治療を終えた。

「私の負けだな」

シグナムはレヴァンティンをネックレス状態に戻しながら言った。

「え、何でだよ？引き分けだろ？」

弦太郎は納得できずに問いを投げた。

「私から注意しておいて引き分けでは、私の負けも同然だ」

「違う、引き分けは引き分けだ」

弦太郎は強く言った。

「いいや私の負けだ、肉はお前の物だ」

弦太郎の言葉も届かず、シグナムは振り向いて帰ろうとした。

「じゃあ！！」

弦太郎がビルを揺らすほどに大きな声でシグナムを止めた。

その声に、シグナムは振り返る。

「一緒に食べようぜー！」の肉！」

パックに入った2つの肉を掲げながら、元気に言った。

「…………良いのか？」

少し躊躇いながら、シグナムは聞いた。

「良いに決まってるぜ、大勢で食う肉の方が美味しいしな！」

戦闘後とは思えないほど清々しい笑顔の弦太郎に。

「ならば…………頂！」

シグナムは方向を変え、弦太郎に近づいた。

その顔は少しだけ微笑んでいた。

「よしつ、じゃあオレン家ですき焼きパーティーだ！」

4人は闘いを一時忘れ、同じ屋根の下で、美味しい肉を楽しんだ。

～烈火の魔剣と雷電の光剣～（後書き）

ふう・・・・・

いえ、本当はファイヤーステイツとボーゲンフォルムでやりたかったのですが。

書いてるうちにエレキスタイルになってしまって・・・

もう少ししたらファイヤーステイツボーゲンを執筆したいです。

なお分からぬ用語がある方は感想で聞いていただければ幸いです。

次回は右衛門左衛門の生活を追います。
〔予定〕

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4219z/>

刀語×Fate ~現代に集う英雄たち~

2011年12月30日22時47分発行